

佳作

敗者達よ、胸を張れ

福島県 会津若松市立永和小学校六年 小貫 蒼依

歴史は勝者によって作られる―。

私の住む会津も、そうしてイメージを作られてしまったのだ。

「負けた会津は、頑固者で新しく日本を作り変えようとしていた新政府に反旗をひるがえした賊軍」たぶん会津は、属する旧幕府軍と対立した新政府軍から、こう思われていただろう。敵を罵りたくなるのは今も昔も同じなのだ。

私はこの会津が負けた『戊辰戦争』の実態を知るまでは、この話を聞くと嫌気がさしていた。

「どうせ、負け戦だし。」

負けた、というのが嫌だった。だったら勝っていたら良いかと言われれば、そうでもない。

「なんで赤の他人のために死ぬの？」
それが、わからなかった。会津のためだろうか？幕

府のため？殿・容保公のためか？住んでいた場所なら引越せばいい。幕府や殿なんて、他人ではないか。家族よりも、他人が大切なのか。心に黒いもやが広がっていった。

しかし本を読んだりして調べていくと、「私は、この安全な時代にいるから、こんな甘ったるい事が考えられるんだ」と、はずかしい気持ちになった。殿は幕府を守るため、そして美しい会津の心と人々を守るため、やむなく戦った。また兵達も、そんな自分達を守ってくれようとしている殿のため、自分達の思い出がたくさんつまった会津の土地を簡単にわたしてたまるかという気持ち、そしてなにより大切な家族を守るため―。命を散らしていったのだ。それを知ったとき私は涙が止まらなかった。ただ「可哀相」だけではなく、「会津を、守る」その一心で戦った所に、心打たれた。そんな心意気に深く感動し、尊敬した。

そして、たくさんの人が命を散らしてまで守ろうとしてくれた、この美しい、私の大好きな会津を未来まで残し、つなげて、「ここを守るために命をかけた人がたくさんいたんだよ」と戦に敗れ、賊軍と言われ、それでもめげずに生きてきた、先人の会津

への誇り、不屈の魂を後世に伝えていきたい。今、
負けた側だからこそ、強く、そう思う。

敗者達よ、胸を張れ！あなた達が命をかけてでも
守りぬこうとしたものを、心を、今私達が受け継い
でゆくから。